史蹟史料部

2023 年 10 月 23 日

#42

日本人墓地公園　ニュースレター

江畑弥吉の顕彰碑

今回は、日本人墓地公園メモリアルプラザにある、江畑弥吉の顕彰碑をご紹介します。

江畑弥吉は 1887（明治 20）年生まれ、滋賀県彦根の出身でした。19 歳で実弟の弥惣吉と二人、商業見学の目的でシャム（タイ国）の首都バンコクに渡りました。当時の金で一万円余りを持っていました。

二人の夢は広大なシャムの土地に日本式水田を開き、大規模農園主となることでした。苦心の甲斐あって目論見は成功しましたが、大河チャオプラヤの氾濫により田も水牛も全て失い失意のどん底に陥りました。

弥惣吉は帰国し、弥吉はシャムに留まり夢の再建を目指しますが成らず、写真館経営に乗り出し、バンコク市内に三店を持つまでになりました。日本から商売用の写真台紙を輸入するうち、輸入の専門的知識を習得し、日用雑貨、ホーロー製品、ラジオなどの輸入業「江畑洋行」の創始者となりました。

好景気の波に乗り商売は成功し、のちシンガポールのコールマン・ストリートにも支店を開設、自宅はマウント・ソフィアにあり、従業員も多くいました。第二次大戦終戦と共に帰国を余技なくされましたが、シャムに残した巨額の財産は没収されたままとなりました。帰国後、大阪に住まい清貧のうちに亡くなりました。

7 月 4 日、江畑弥吉の顕彰碑を訪ねて、弥吉の実弟 弥惣吉の孫にあたる方が、日本人墓地公園にお越しくださいましたので、顕彰碑を製作に携わった杉野元事務局長がご案内させていただきました。

江畑様はお仕事でシンガポールを訪れる機会が度々あり、お兄様も以前お仕事で駐在をされていたそうで、現在も当地に縁があり、日本人墓地公園にも足を運んでくださいました。

史蹟史料部発行の本「戦前シンガポールの日本人社会 - 写真と記録 改訂版 - 」にも、江畑弥吉についての記述がありますので、ご紹介しました。また付録の地図で、自宅のあったマウント・ソフィアの場所をご案内しました。

Mt.Sophia にあった一般雑貨輸入販売業
「江畑洋行」創始者江畑弥吉宅　大正末期～昭和初期
Founder of "Ebata Yoko", Yakichi Ebata's residence at Mt Sophia. "Ebata Yoko" was grocery importer and sales

現在のドビー・ゴート駅近く、プラシンガプラの裏手にあるマウント・ソフィアにあった自宅前で撮影した写真が掲載されています。

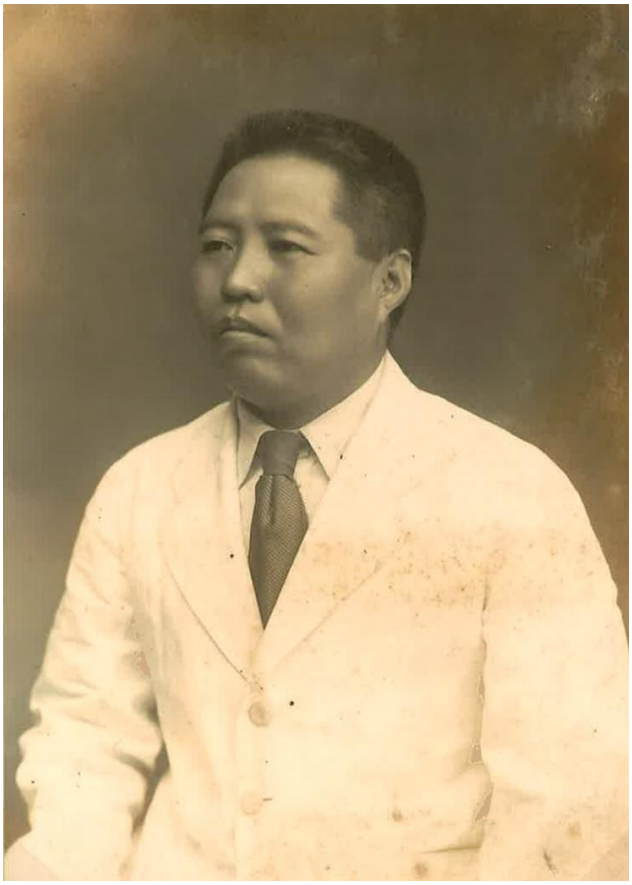
土出忠治著「輸出雑貨が軌道に乗るまで」によりますと、弥吉はシャム語を身に付け、雑貨輸入業と写真館の商勢は大いに揚り、ペナン、ラングーン、コーランポウ、香港、上海他合計 7 カ所に支店や出張所を持つに至りました。

昭和 62 年 9 月に、日本とタイが正式な国交を樹立して 100 年を迎えたのを記念して、「友好の世紀」写真展が朝日新聞社主催で東京有楽町西武デパートで開かれた際に、出口付近を飾ったのが、弥吉の写真館「プロム」の写真でした。

写真館プロムはタイ人の妻の名前で、プロムが亡くなったあとも 2 人の妻との間に 5 人の子を設け、現在その子孫の中にはデンマークで結婚をされた方もいらっしゃるのだそうです。

終戦後に帰国した弥吉は、大阪の河内で静かに晩年を送り、昭和 27 年 1 月 29 日に、65 才で亡くなりました。

コールマンストリートにあった江畑洋行シンガポール支店の前にて、左が江畑弥吉、右が弥惣吉。



昭和初期の江畑弥吉ポートレート

昭和 5 年頃、弥惣吉が弥吉を訪問した折の記念写真。聖アンドリュース教会前にて。中央に座っているのが弥惣吉。右端に立っているのは弥吉と妻プロムの間の長男・朔弥。江畑洋行シンガポール支店の当時の従業員たち。

江畑様の祖父 弥惣吉は、弥吉とともにシャム国で農場経営に全力をあげた後、1910（明治 43）年 4 月 27 日に帰国し、以来、大正・昭和と、江畑洋行の貿易事業の日本側受けてとして、その一翼を担いました。1969（昭和 44）年 1 月 30 日、79 才で亡くなられたそうです。

江畑様のお父様（弥惣吉の子）がまとめられたファミリーヒストリーも拝見させていただきました。日本人墓地公園をご訪問いただき誠にありがとうございました。

出典：日本人墓地公園内設置　江畑弥吉顕彰碑
参考文献：「戦前シンガポールの日本人社会 - 写真と記録改訂版 - 」シンガポール日本人会 史蹟史料部　2004 年改訂版発行
「輸入雑貨が軌道に乗るまで」土出忠治著　1962 年発刊